

八ヶ岳通信

■ 尖石縄文考古館

国宝 中ッ原遺跡出土の仮面土偶（仮面の女神）

昨年の8月21日、湖東山口の中ッ原遺跡出土の土偶（仮面の女神）が国宝に指定されました（写真1）。1995年6月15日に指定された米沢埴原田の棚畠遺跡出土の土偶（縄文のビーナス）に続いて市内2番目の国宝で、縄文時代のものでは6番目、土偶では5番目の国宝ということになります。

この土偶は国宝になる以前から、「国宝の縄文のビーナスを目的で来たけれども、顔が三角のあの土偶はなんだ！？」あっちの土偶の方がすごいじゃないか！」と当館を訪れる多くの来館者に強烈な印象を与えていました。

どっしりとした脚、胸を張った胴体は全体のプロポーションを威風堂々たる姿として印象付けます。そして三角形を逆さまにした顔は、一度見たら忘れないほどの強烈なインパクトを与えます。

さらに、表面は丁寧に磨き上げられており、正面背面ともに描かれた腹部の同心円や胸部のたすき掛けのような模様は、何本もの線がまったく乱れることなく施されています。これらの模様の特徴からおよそ4000年前に作られた土偶であることがわかりますが、大きさ、均整のとれたプロポーション、見事な模様と磨き上げから、土偶造形の頂点に立つ資料と評価されています。

仮面の女神の愛称で親しまれているこの土偶は、2000年の8月23日に出土しました。出土した状況をみると、お墓と考えられる穴に体の左側が下（穴の底）向きで寝かせて安置していましたが、右脚はどういうわけか割っていました。発掘を進めていき割っていた右足を取り上げたところ、胴体側の割れ口に破片がはまり込んでいました（写真2）。しかも、内側の面が

外を向いていましたので、自然にそうなったとは到底考えられない状態でした。

その破片を取り除き、胴体に詰まっていた土を搔きだすと、胴体内部には別の破片がもう1点入れられていることがわかりました。さらに、割れた右脚の内部にも2つの破片が入れられていました。この状況は、右脚を意図的に破壊したのちに、その破片を胴体内部や右脚に入れて、胴体の割れ口をふさぐように別の破片をはめ込んだ、という葬送儀礼をおこなったのではないかと思われます。

日本全国で土偶は2万点近く出土していますが、お墓から出土する土偶は伝聞を含めても20例もないなかで、お墓への供え方がこれほど詳しくわかった例はありません。造形的に優れている点に加えて、こうした4000年前の葬送儀礼を考えるうえで、とても貴重な出土状況を詳細に把握した点が国宝指定の最大の要因です。



(写真1)



(写真2)

平成26年（2014）年度開催の企画展

八ヶ岳総合博物館では、平成26年（2014）年度の企画展を3回開催しました。

1 こて絵の世界

八ヶ岳山麓の家には、土蔵の壁などに、漆喰によつて絵が描かれているものが多く見られます。このこて絵を探査した芦田吉美氏（1947-2013）より、平成25年（2013）に調査した写真などを、当館に寄贈していました。

寄贈していただいた写真やデータをもとに、4月12日から6月15日まで、企画展を開催しました。主に茅野市内のこて絵を展示しましたが、様々な種類のこて絵があることが、芦田氏の調査でわかったと思います。

こて絵は、伊豆の長八（本名 入江長八 1815-1889）が芸術の域まで高めた人物と言われ、入江長八に学んだ小川天香（本名 善弥 1878-1950）が諏訪地方に伝えたと言われます。

会期中、左官職人の永田巻則氏から、氏の作成されたこて絵をお貸しいただき、展示しました。また、竹村真己司氏の紹介で、竹村氏の祖父の竹村市兵衛が市内の検校庵に奉納したこて絵を、検校庵から寄贈していただきました。竹村市兵衛作のこて絵は、明治30年（1897）のもので、小川天香が諏訪へこて絵を伝える以前のものと判明しました。

企画展に伴い、左官職人である矢沢将利氏と下平悟氏により、

「『こて絵』を作ろう」というイベントを開催し、より、こて絵について理解を深めました。

2 北八ヶ岳のコケ

北八ヶ岳、とくに白駒池周辺には豊かな森が広がり、そこにみられるコケの群落は規模と美しさの点で際立っています。「日本の貴重なコケの森」に認定（日本蘚苔類学会）される北八ヶ岳のコケについて、7月26日から9月28日まで展示を行いました。

展示した写真は、国立科学博物館植物研究部陸上植物研究グループ長である樋口正信理学博士からお借りしたもので、非常に美しいコケの写真を展示しました。

北八ヶ岳には、様々な種類のコケがあることを紹介しました。



企画展 コケのテラリウムづくり（コケの採集）

開催に関連して、8月3日には樋口博士による講演会を、8月17日には、ミュージアムパーク茨城県立自然博物館学芸員である鵜沢美穂子先生によるワークショップ「コケのテラリウムづくり」を、9月23日には北八ヶ岳コケの会会員による「コケの観察会」を行いました。

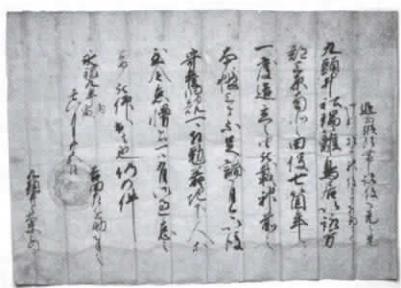
3 九頭井太夫家文書の世界

茅野市ちの上原に、葛井（九頭井）神社があります。葛井神社は、諏訪上社の摂社の一つで、大晦日に行われる葛井池神事は、諏訪上社の特集神事として有名です。この、葛井神社の神主を、明治時代まで勤めていた、九頭井太夫矢島家から、平成6年（1994）と平成23年（2011）に当館へ古文書等の寄託を受け、寄託資料により8月9日～10月13日に展示を行いました。特に、平成6年に寄託された史料は、戦国時代の甲斐武田氏から発給されたもので、茅野市有形文化財に指定されています。

江戸時代までの九頭井太夫は、葛井神社の神主であるとともに、諏訪上社の神楽役という神職も勤めており、寄託された文書からは、葛井神社の歴史とともに、諏訪上社の神楽役について展示を行いました。

企画展に関連し、10月4日に東京外国语大学教授である、吉田ゆり子先生に、「近世農村の古文書」という講演をしていただき、江戸時代の古文書や九頭井太夫矢島家文書に対する理解を深めました。本企画展は、神長官守矢史料館

と合同で開催し、守矢文書中にある葛井神社に関する古文書を、守矢史料館でも展示を行いました。



永禄9年閏8月25日
武田家朱印状（九頭井太夫家文書）

茅野市ミュージアム活性化事業

茅野市内のミュージアムは、その文化資源を活用しながらそれぞれに活発な運営をしていますが、個別の活動となってしまっています。このことから、ミュージアムの連携強化により、文化資源を効果的に活用し、地域の観光振興および地域の活性化に資することを目的とする、茅野市ミュージアム活性化推進委員会が組織されました。平成24年度からはじまり3年目となる本年度も、設置者が異なる様々な分野の6館（茅野市尖石縄文考古館、茅野市八ヶ岳総合博物館、茅野市神長官守矢史料館、茅野市美術館、京都造形芸術大学附属康耀堂美術館、蓼科高原美術館・矢崎虎夫記念館）による茅野市ミュージアム活性化事業を行ない、茅野市の玄関口とも言えるJR茅野駅に隣接する文化複合施設・茅野市民館内にある茅野市美術館を事業展開の拠点としました。

本年度の事業テーマを「結ぶ～いにしえから未来へ～」としました。そして、同事業による連携事業として、①ちのミュージアム・スタンプラリー（7月12日～11月30日、6館中4館のスタンプを集めると特製マグネット、または特製クリアファイルをプレゼント）、②パネル展示（7月12日～9月15日、6館の紹介パネル、スタンプラリーのパネルなどを展示）、③ワークショップ＆講座が大集合！（7～9月、全6回、各館が担当）、④ちのミュージアム・ピクニック（10月、全3回、各館をバスで巡る）、⑤ちのミュージアム・コンシェルジュ講座（11月、全2回、観光事業に携わる方、まちおこしに興味のある方対象）、⑥シンポジウム「結ぶ～いにしえから未来へ～」（11月22日）を行ないました。⑥は基調講演に毛利直子氏（高松市文化芸術振興課副主幹）を、パネリストに山根宏文氏（松本大学観光ホスピタリティ学科教授）、住中浩史氏（アーティスト）、守矢昌文（茅野市尖石縄文考古館館長）、辻野隆之（茅野市美術館長）を、コーディネーターに徳永高志（茅野市民館コアアドバイザー）を迎えました。

①ちのミュージアム・スタン



③ワークショップ＆講座が大集合！
vol.4 茅野市尖石縄文考古館「小さい仮面の女神を作ろう」
会場：茅野市民館イベントスペース

ラリーは昨年度から開始した事業です。ミュージアムに馴染みの薄かったであろう子どもから高齢者までの幅広い年齢層の市民や観光客の参加がありました。②パネル展示はJR茅野駅の東西通路に面しているイベントスペースを会場とした。多くの市民や観光客に対し情報発信を行なうことができました。③ワークショップ＆講座が大集合！は各館の企画によるもので、

各館について知り、体験できる事業とし、新規利用者層創出を目的とし、幅広い年齢層の参加がありました。④ちのミュージアム・ピクニックは昨年度から開始した事業です。茅野市内のミュージアムを知る入門的な機会となりました。⑤茅野市ミュージアム・コンシェルジュ講座では、観光事業に携わる多くの方々に参加いただき、ミュージアムと観光の関係をさらに考えていく機会となりました。⑥シンポジウムは本年度の連携事業の総括的な位置付けで開催しました。地域をつくる人、産業を結ぶことで広がる茅野の未来を考えました。

今後も各館での個別の活動にとどまらず、「市民」がミュージアムと共に多様な文化資源を活かしながら、地域のアイデンティティを国内外に発信できるような環境を目指していければと思います。



④ちのミュージアム・ピクニック
その2 会場：京都造形芸術大学付属康耀堂美術館



⑤茅野市ミュージアム・コンシェルジュ講座
第2回 会場：茅野市八ヶ岳総合博物館



⑥シンポジウム「結ぶ～いにしえから未来へ～」
会場：茅野市民館マルチホール

国史跡 駒形遺跡発掘調査

○国史跡駒形遺跡発掘調査

市内にある国史跡のひとつ駒形遺跡では昨年の平成26年11月6日から12月26日まで、遺跡保存・整備のための発掘調査を行いました。

「駒形遺跡」は縄文時代を通して長期間集落が営まれた、市内でも数少ない遺跡です。中でも今から約5000年前から4000年前の縄文時代中期には大集落が営まれました。また、多くの黒曜石製の石器が見つかっており、黒曜石の製作や交易の実態を知る上で重要な遺跡と考えられています。

今回の発掘調査では、その大集落の規模や構造の把握を目的とし、縄文時代中期に限定しての調査となりました。当時の大集落では住居を計画的にドーナツ状に配置した「環状集落」と呼ばれる集落形態がよく見られます。駒形遺跡でも同様に計画的な「環状集落」が形成されていたのかを確認するために、これまでの調査から想定される集落域に十字のトレントと呼ばれる溝を掘りました。その結果、縄文時代中期に限っては住居址は北側で1軒確認できたのみで、他の部分は住居が無い空間があることが分かりました。こうした

成果から、縄文時代中期頃の駒形遺跡では大規模な環状集落が営まれていたことが裏付けられました。

国史跡指定地内の調査は平成8年の第四次調査以来18年ぶりとなりました。これまで地域の方々のご協力の下、大切に保存されてきた駒形遺跡なので、今回の発掘調査でも掘る部分を最小限に留めました。

現在、調査成果の整理作業が進行中です。これまでの調査成果を含めて得られた資料が、今後の駒形遺跡保存整備のための大切な資料となります。



【石蓋がされた埋甕】

守矢文書にみる室町時代の古文書

室町時代の古文書・古記録は、諏訪地域ではありません残されておらず、大変貴重です。守矢文書の中に、室町時代の古文書・古記録類が数多くあり、室町時代の状況を現代に伝えています。

守矢史料館では、企画展「守矢文書にみる室町時代の古文書」を、4月26日から6月29日まで開催しました。企画展で展示した史料は全部で14点です。

そのうち、『守矢満実書留』を取り上げます。守矢満実は、15世紀後半に諏訪上社の神長を勤めていた人物で、数多くの記録を残しています。そのうちの1点が『守矢満実書留』です。同史料は、寛正6年(1464)から延徳4年(1492)までの、諏訪上社の神事や、諏訪上社周辺の情勢、信濃国や甲斐国的情勢などが記されており、中世史料としては欠くことのできないものです。この史料の文明4年(1472)4月16日の記事に、この日の午後2時頃に、大宮(上社本宮)の蓮池の西

側寄りと、南側から、濃い血のようなものが流れ出たと記されています。その地は、固まり、手に着いたものを洗っても、落ちなかつたといいます。また、大宮蓮池ばかりではなく、「久須井池」(葛井池 茅野市ちの上原)も血の池となつたと記されています。

当時の人たちは、「ムクリ」が日本を攻めてきたのを、諏訪・住吉・八幡が戦い、その時の血だと解釈したようです。

「ムクリ」とは、蒙古のことをさしているようですが、元寇から約200年経った室町時代後期でも、元寇について語り継がれていたようで、このような解釈になったと考えられます。

守矢史料館では、他に8月9日から10月13日まで企画展「守矢文書にみる九頭井神社」を、平成27年1月1日から2月11日まで企画展「未年の古文書」を開催しました。